



Title	オーストリア=ハンガリー二重帝国の構造と特質（一）－ハンガリーの立場を中心に－
Author(s)	矢田, 俊隆; YADA, Toshitaka
Citation	北大法学論集, 25(2), 1-29
Issue Date	1974-10-22
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16170
Type	departmental bulletin paper
File Information	25(2)_p1-29.pdf



オーストリア＝ハンガリー二重帝国の構造と特質 (一)

——ハンガリーの立場を中心に——

矢 田 俊 隆

目 次

はしがき

- 一 学説史的展望
 - 二 政治的結合と経済的發展の問題
 - 三 帝国兩半部の経済成長の比較
 - 四 共同関税地域の影響(以上本号)
 - 五 外国資本の役割(以下次号)
 - 六 ハンガリー＝ナシヨナリズムの性格
 - 七 社会的諸階層と民主化の可能性
 - 八 二重帝国における政策決定過程
 - 九 軍隊と外交
- むすび

はしがき

十九世紀から二十世紀にかけてのヨーロッパナショナリズムを考察の対象とするとき、ドイツ・イタリアの統一運動やバルカン諸民族の独立運動と並んで、ハプスブルク帝国の民族問題が重要な位置をしめることは、いうまでもない。多民族国家ハプスブルク帝国にとって、民族問題は一つの宿命ともいべきものであったが、その展開のうえで決定的な転回点になったのは、一八六七年のアウスグライヒとそれに伴うオーストリア・ハンガリー二重帝国の成立である。このテーマについて、従来欧米ではおびただしい研究が行なわれ、数多くの成果が生まれているが、基本的な論点をめぐって幾多の対立があり、今なお終局的な見解の統一をみるに至っていない。一方わが国では、この問題はまったく未開拓の分野に属し、本格的な研究は皆無といってよい状態である。本稿の目的は、最近の欧米の研究成果をふまえて、アウスグライヒの結果生まれたオーストリア・ハンガリー二重帝国の構造と特質について立ち入った考察を行ない、東・中欧の民族問題の基本的性格を明らかにしようとするにある。そのためには、内政・外交・経済・軍事など多くの角度から検討を加え、それらの成果を総合的に評価したうえで結論を下す必要があるが、ここでは、このような包括的研究の第一着手として、まず経済的側面を取りあげることにしたい。しかし本論にはいる前に、あらかじめ全般的な論点を整理し、問題の所在を明らかにしておくことが便利であらう。

少数のドイツ人が多数の異民族のうえに専制的支配を行なうハプスブルク帝国の政治体制は、一八四八年の革命以後衰退の道をたどりはじめたが、一八五九年のイタリア統一戦争に敗れてロンバルディアを失い、さらに一八六六年の普墺戦争に敗れてドイツ連邦からしめ出された結果、オーストリア・ドイツ人の中央集権は危機に直面し、領内の民族運動は一段と激化した。そのうち、輝かしい歴史をもち特に強く民族的自立を望んでいたのは、ハンガリーのマ

ジャール人であったから、皇帝フランツ・ヨーゼフ二世は、敗戦後のオーストリアの分解を防ぎケーニヒグレーツの復讐をはたすためには、ハンガリーへの譲歩による「二重制度」をとるほかないと考えるに至った。そこでオーストリアの支配層はマジャール人貴族と妥協し、一八六七年ハンガリー王国の建設を許してこれをオーストリアと対等の地位に引き上げ、皇帝がハンガリー国王を兼ねるオーストリア=ハンガリー二重帝国が成立したのである。

アウスグライヒの結果、ハンガリーは歴史的国境の内部で独自の憲法・議会・政府をもつ独立の王国となり、内政にかんしては完全な自治権をもつことになった。ここにマジャール人の多年の願望は一応かなえられ、オーストリアとハンガリーの間の紛争は一先ず落着し、両国の関係は以後親密の度を増していった。しかしその反面、アウスグライヒはスラヴ系その他の領内諸民族をまったく無視したものであったから、彼らを二重帝国に対する決定的な反対者の立場に追いやり、以後ハプスブルク帝国の民族問題は、西部と東部でそれぞれ支配的地位を占めるドイツ人およびマジャール人と、他の従属諸民族との間の対立関係に移行し、これら諸民族の高まる反抗とドイツ人・マジャール人のそれに対する対応が中心テーマとなるのである。

しかし、以上ですべて尽きると考えるならば、大きな誤りである。オーストリア=ハンガリー二重帝国は、完全な独立国であるオーストリアとハンガリーを単なる同君連合の形でつないだものではなかった。両者は内政的に独立した二つの国家になったとはいいながら、軍事・外交・財政の点でなお実質的な結合を保ち、これらの政務は両国を代表する共通閣僚の手で処理された。また、予算案を承認し共通の諸省を監督する任務をもつ「代理委員会」Delegationが設けられたが、この共同の会議体は、それぞれオーストリアとハンガリーの議会から選出される各六〇名の委員をもつ二つの委員会から成り、ウィーンとブダペストで交互に開かれることになっていた。そのほか、通商・関税・通貨・鉄道・帝国銀行にかんする事項は、共通大蔵大臣の手を離れ、両国が独立国の立場で相互に協定を結ぶことにな

ったが、この協定は十年ごとに更新されなくてはならなかった。こうした共通部分の運営をめぐる、両国の利害は種々対立し、両者の間にはしばしば衝突がおこり、それは時とともに深刻化していった。それゆえアウスグライヒ後も、ハンガリーとオーストリアの間の関係がハプスブルク帝国の民族問題の重要な一面をなしていたことは、否定できない。

本稿は、アウスグライヒ後の両国間の関係を、主としてハンガリーの側から考察しようとするものであり、具体的には次の諸点が問題となる。アウスグライヒは実際上ハンガリーにどのような利害得失をもたらしたのか。二重帝国の内部でハンガリーはオーストリアに対して優越した地位にあったか、それとも従属的な地位にあったのか。さらにハンガリーは二重帝国の重要な支柱としてその統合を助ける役割を果たしたのか、それとも帝国の統合を損う分解的機能を果たしたのか。これらの諸点の具体的な検討は、ハプスブルク帝国の複雑な構造とそこにおける民族運動のいくんだ性格を説明するうえの重要な鍵となるであろう。

(1) アウスグライヒにかんする研究は、Louis Eisenmann, *Le Compromis Austro-Hongrois de 1867*, Paris, 1904 以来おびただしい成果が現われているが、最近のものでは *Der Österreichisch-Ungarische Ausgleich von 1867, Vorgeschichte und Wirkungen*, hrsg. von Forschungsinstitut für den Donauraum, Wien, 1967; *Historisches Geschehen im Spiegel der Gegenwart, Österreich-Ungarn 1867—1967*, hrsg. von Institut für Österreichkunde, Wien, 1970 が、問題を概観・展望するのに便利である。

(2) オーストリア・ハンガリー二重帝国の構造と特質を明らかにするためには、アウスグライヒの成立事情の正確な認識が前提となり、両者は不可分の関係にあるといつてよい。しかし、アウスグライヒの成立過程については別稿で立ち入った考察を行なう予定であり、ここでは必要な限りでふれるにとどめたい。

(3) 従来ハプスブルク帝国の民族問題は二重主義か連邦主義かというた国制上の契機、言語問題とその影響、顕著な人物の役割などに重点がおかれ、社会経済的な側面はほとんど顧みられなかったといつてよい。しかし、最近ようやくこうした視角から鋭

「アプローチが行なわれはじめ、かなりの成果をあげている。Rudolf Fink, Die österreichisch-ungarische Monarchie als Wirtschaftsgemeinschaft, München, 1968; Pamlényi, Social-Economic Researches of the History of East-Central Europe, Budapest, 1970; H. Matis, Österreichs Wirtschaft 1948-1913, Wien, 1972 など」その点を注目される。ハプスブルク帝国の、民族問題を含む基本的諸問題を正確に捉えるためには、ぜひともこうした新しい視角や研究方法に依拠する必要がある、本稿でもそうした意味で、まず最初に経済的側面に目を向けたいと思う。

一 学説史的展望

二重帝国においてハンガリーははたして優越した地位にあったか、それとも従属的な地位にあったのか、という問題について、従来の多くの著書や論文は、相反する見解に充たされている。まず比較的新しい研究を取りあげてみよう。ウィーン大学のツェルナー Zöllner は、一九六一年に刊行された標準的なオーストリア史の概説のなかで、二重帝国の政治状況は、ハンガリーが共通経費をより少なく分担しながら、原則的にはオーストリアと同等の権利をもち、実際にはオーストリアよりも優勢であったという事実によって特徴づけられる、と述べている¹⁾。一方ハンガリーのシャーンドル Sándor は、一八六七年から一九〇〇年に至る時期のハンガリー経済史にかんする研究——これは一九五〇年代には標準的著作とみられたものである——のなかで、一八六七年のアウスグライヒまでに、ハンガリーは以前の「植民地的」地位から「半植民地的」地位に変わったにすぎず、「相対的に優越した資本力をもつオーストリアは、農業国であり資金の不十分なハンガリーを、依然半植民地的従属の状態に保った」と記している²⁾。

二重帝国の両半部の相互関係について、以上二つの見解は対照的であるが、これは実は、歴史家の間に広範囲に存在する意見の相違を反映したものであり、しかもそれは、二重帝国の末期およびその解体後の時期に早くも支配した、相反する政治的見解の影響を、強くこうむっているのである。次にその系譜を簡単にふり返ってみよう。ハンガ

リーに対する批判的な見解を最初にはっきりした形で表明したのは、オーストリアの歴史家レートリッホ Joseph Redlich とビーブル Viktor Bibl であつた。レートリヒはその著書「オーストリアの国家と帝国問題」(一九二〇)のなかで、一八六七年のアウスグライヒは、ハンガリー人にとっては勝利に等しいものであり、その結果樹立された二重帝国においても、ハンガリーは優位を占めた、と述べ、ビーブルは「オーストリアの崩壊」(一九二四)のなかでいさう鋭く、一八六七年から一九一四年に至る全時期を通じて、帝国の両半部間の「同等」は殊勝な願望以上のものではなかつた。なぜなら、ハンガリー人の要望は彼らの政府と議会の決議という形をとつて、全帝国の至るところでつねに優勢であり、オーストリアはこれに服従し従属する結果になつたからである。ハンガリー人のショーヴィニズムこそ、二重帝国を衰退にみちびいた主要な原因であつた、と述べている。

このような見解は一九二〇年代のオーストリアの歴史家たちの間で支配的であつたが、第二次大戦後の時期にも、事実上変わらぬ形で現われている。たとえば、この時期を代表するオーストリアの歴史家ハンチュ Hugo Hantsch は、総合的な大著「オーストリア史」のなかで、帝国の政策決定に際して、特に対外政策の領域で、ハンガリー人はドイツ人よりもはるかに大きな影響を及ぼした。それは主として、彼らのゴールおよび行動のコースがより、一貫していたためであり、ハンガリーの独立に対する熱望および彼らの政府のナショナルリスティックな政策こそ、帝国における最も危険な分解的要素であつた、と述べている。二重帝国の国内事情を熟知しているアメリカ在住の歴史家カン Robert A. Kann も、アウスグライヒは、ドイツ系オーストリアの政治的リーダーシップを、ハンガリーにおける、ある意味では全帝国におけるマジヤール人の支配者的役割に従属させた、という結論に達している。なお、二重帝国におけるハンガリーの優位を指摘する見解は、オーストリア以外の歴史家にも共有されており、西ドイツのゲオルク・フランツ Georg Franz やフランスのドローズ Jacques Droz はその代表的な例である。しかしこのような見解

が、全体としてオーストリア側の立場を反映したものであることは、明らかである。

次に、ハンガリー側からの二重主義批判に目を向けよう。それはラヨスコッシュェート Lajos Kossuth に端を発するもので、彼は一八六二年にドナウの連合のプランを立案しているが、そこにみられるドナウ地域再編成の構想は、一八六七年のアウスグライヒとは正反対のものであった。アウスグライヒの成立後、彼はこれを批判して、民族的な権利と主権を放棄して単なる州の地位に落ちこむことの危険を系統立てて述べており、このテーゼがその後長く、彼の信奉者や追隨者の議論の基礎になったのである。二重帝国のもとでハンガリーが抑圧をこうむっているという多分に推定的な見方は、独立党の機関紙にあふられてハンガリーの世論のうちに定着し、多くのハンガリー人は、自国が「州的・植民地的存在」⁽¹⁰⁾におちいる運命にあると確信するに至った。こうした見解は、両大戦間期の公式の歴史叙述では背後に押しやられているが、そのある面は、第二次大戦後ふたたび、ハンガリーのマルクス主義史家の著作のなかに特異な形でよみがえっている。

マルクス主義史家たちは、アウスグライヒをオーストリアとハンガリーの間の単なる国制上の協定ないしは双方の間に権力を分け合うための協定とは考えず、それを大きな歴史的進行の局面としてとらえる。彼らによれば、アウスグライヒは、一八四八年の革命とともに始まった王国のブルジョア的「民族の変形の第一期の終幕であり、当時のハプスブルク帝国の国際的・国内的な力関係のなかで、「上から」押しつけられた反民主的協定であった。⁽¹¹⁾二重主義体制についても、彼らはその社会的背景および社会的性格を強調し、ハンガリー支配階級の民族政策を鋭く批判する。しかしオーストリアとの関係については、彼らは「民族的諸権利の放棄」、「不完全な主権」、ハンガリーのオーストリアに対する政治的・経済的依存を主張する点で、帝国存続当時の二重主義反対者たちのテーゼを引き継いでおり、⁽¹²⁾ハンガリーの「半植民地的地位」を裏書きする幾多の資料を使って、議論を進めている。最初にふれたように、一八六

七年のアウトスグライヒはそれ以前のハンガリーの「植民地的」地位を「半植民地的」地位に変えたにすぎないという命題は、第二次大戦後の十年間に、ハンガリーでは教科書にも取りいれられ、特殊研究においても一般に受けいれられたものであった。⁽¹³⁾その後一九五八年のブダペスト歴史家会議で、シャーンドル Vilmos Sándor は「半植民地的従属状態」という規定を修正して、「二重王国の階層的従属体制」という概念を用いているが、彼はこの新しい概念の枠組のなかで、依然ハンガリーが従属と被抑圧の状態にあったことを証明しようとしている。

以上の学說的回顧によって、われわれは、二重帝国内のハンガリーの地位と役割について、大別して二つの対立する見解があることを知った。しかも歴史家のこの問題に対するアプローチは、伝統的な同情ないし敵意に根ざす場合が多く、ハンガリーの政治的、社会経済的発展については、最新の方法に基づく精密な客観的記述の欠けている点特徴的であるといつてよい。われわれの課題は、従来の諸見解の論旨に注意を払いながらも、主観的ないし感情的な偏見を離れ、科学的な方法に立脚してできるかぎり公平かつ客観的に考察を進め、妥当な結論を引きだすことだけばならぬ。

- (一) Erich Zollner, *Geschichte Österreichs. Von den Anfängen bis zur Gegenwart*, 2 Aufl. Wien, 1961, S. 412.
- (二) Vilmos Sándor, *Nagyipari fejlődés Magyarországon 1867—1900*, Budapest, 1954, p. 13 f.; Péter Hanák, "Hungary in the Austro-Hungarian Monarchy: Preponderancy or Dependency?" *Austrian History Yearbook*, Vol. III Pt. I, 1967, p. 260 f.
- (三) Joseph Redlich, *Das österreichische Staats und Reichs Problem. Geschichtliche Darstellung der inneren Politik der habsburgischen Monarchie von 1848 bis zum Untergang des Reiches*, 2 Bde., Leipzig, 1920, Bd. II, S. 585f., 672—675.
- (四) Viktor Bibl, *Der Zerfall Österreichs*, Bd. II, *Von Revolution zu Revolution*, Wien, 1924, S. 306—308, 317 f., 391, 406.
- (五) Hugo Hantusch, *Die Geschichte Österreichs*, 2 Aufl., 2 Bde., Graz, 1962, Bd. II, S. 379—381, 459—461.

- (6) Robert A. Kann, *The Multinational Empire : Nationalism and national Reform in the Habsburg Monarchy, 1848—1918*, 2 vols., New York, 1950, Vol. 1, p. 89.
- (7) Georg Franz, *Liberalismus. Die deutsch-liberale Bewegung in der habsburgischen Monarchie*, München, 1955, S. 363.
- (8) Jacques Droz, *L'Europe Centrale : Évolution de l'idée historique de Mittel Europa*, Paris, 1960, p. 126, 162 f.
- (9) Kossuth Lajos Iratai, (2 ed., 13 vols., Budapest, 1880—1911. Vol. VII, pp. 290—323, Vol. VIII, pp. 10—14, 27—29, 56 f. ; Hanák, p. 264)
- (10) 第一次大戦後ハンガリーは多くの領土を失い悲惨な状態におちいったために、過去の二重帝国時代への懐しい回想が生まれ、画大戦間のハンガリーの歴史叙述の標準的な著作は、二重主義体制の欠陥を批判しながらも、二重制度に好意をもつ帝国の両半部の間には真の平等があったとし、二重帝国をその中に生活した人々にとって最良の統治形態であったとみている。Balint Hóman and Gyula Szekfű, *Magyar történet*, 3 ed., 5 vols, Budapest, 1935—36 ; Sándor Pethő, *Világostól Trianonig*, 3 ved., Budapest, 1925 ; Gusztáv Gratz, *A dualizmus kora. Magyarország története 1867—1918*, 2 vols., Budapest, 1934 などがそれである。なおこの見方は、最近 Julius Mircolczy, *Ungarn in der Habsburger Monarchie*, Wien, 1959 の中にまたたび現われている。
- (11) アウスグライヒについてこのようなマルクス主義的評価を最初に展開したのは、József Révai, "Kossuth Lajos," in *Marxizmus, népcsiesség, magyarság*, Budapest, 1948, p. 159 f. である。Hanák, 264.
- (12) 彼らのアウスグライヒ批判は、ハンガリーが民族的独立を犠牲にして譲歩を行なった点に向けられているが、そこには、反アウスト的民族統一の精神が基礎にあることは、否定できない。Hanák, p. 265 参照。
- (13) *Ibid.*
- (14) Vilmos Sándor, "Der Charakter der Abhängigkeit Ungarns im Zeitalter des Dualismus," in *Studien zur Geschichte der Österreichisch-Ungarischen Monarchie*, hrsg. von Vilmos Sándor und Péter Hanák. *Studia Historica Academiae Scientiarum Hungaricae*, Nr. 51, Budapest, 1961, S. 303—330.

二 政治的結合と経済的發展の問題

本章の課題は、まず経済的側面から、二重帝国におけるハンガリーの地位を正確に捉えることである。その際われわれはまづ先に、従来はげしい論議の行なわれてきた一つの重要な問題、すなわち、オーストリアとの政治的な結びつきを、ハンガリーの経済的発展の見地からいかに評価すべきか、という問題に直面しなければならぬ。すでにみたように、二重帝国の時代、帝国の両半部は共通の関税および通貨地域を形成したが、このような関係は、ハンガリーにいかなる得失をもたらしたのであるうか。二重帝国内のハンガリーの経済的地位を取り扱った文献は、広範にわたるが、この問題にかんする評価は、これまた論者の政治的立場を反映して、ほぼ二つに大別される、その一つは、ハンガリーが有利な経済的状况にあったことを強調するものであり、他の一つはオーストリアが優位にたち、そのためにハンガリーが不利な影響をこうむったことを力説するものである。両者の間には、すでに帝国存統中からはげしい論争が行なわれたが、その中心に立ったのは、「共同関税地域」の評価をめぐる問題であつた。前者すなわち共同関税地域の支持者たちは、二重主義時代のハンガリーに顕著な経済的進歩がみられることを力説し、ハンガリーの農業家が、帝国の西半部に一つの安全なもしくは特惠的な市場をもつたことによつて幾多の利益を享受した事実を、指摘する。彼らはまた、近代的な工業の発展は共同市場地域においても起こりうると主張し、ハンガリーの工業化が急速なペースで進みつつあることを示そうとした。このような論旨は、第一次大戦前夜に出版されたさまざまな著作のなかにうかがわれる。¹⁾

しかし、ここで特に注目する必要があるのは、むしろ第二の見解である。ハンガリー独立関税地域の擁護者たちは上述の論旨に反対して、共同関税領域こそハンガリーの地主に大きな恩恵を与え、ハンガリーの外国貿易を不利な立場におき、オーストリアとの財貨交換を不釣合なものにし、彼らの国の工業化を損うもろもろのハンディキャップを生み出した原因である、と主張した。とりわけ興味深いのは、工業化なしには経済的後進状態を抜け出すことができ

ないのに、オーストリアの急速な工業化がハンガリーの工業発展を妨げている、と論じている点である。一八八〇年代のまた世紀転換当時の多くの研究は、まさにこのような考え方を推し進めたものであった。⁽²⁾

これらの議論はその後の歴史解釈のなかにさまざまな形で受け継がれているが、特に重要なのは、第二次大戦後のハンガリーの歴史家たちの見方である。彼らもまた、共同関税地域の存在がハンガリーの経済に不利益をもたらした事実を強調し、工業化のパターンが一方に偏したものであったこと、すなわち、食品加工業の発展に重きがおかれて軽工業が十分に開発されず、そのことが帝国でのハンガリーの工業発展能力に重大な制限を加える条件になったことを、指摘する。彼らはまた、ハンガリーが経済的にオーストリアに依存し搾取されたという命題を原則的に支持し、農産物と工業製品の交換は不可避免的に公正を欠き、オーストリアがあらゆる商業上の利益を得た、と主張する。さらに彼らによれば、オーストリア資本家のハンガリー企業への広範囲な投資は、ハンガリー内で使用されたかもしれぬ蓄積資本の一部を脇にそらせ、オーストリアに対するハンガリーの経済的・政治的依存関係を増大させるはたらきをしたのである。⁽³⁾

われわれの仕事は、二重国内のハンガリーの経済状況の実態を正確に把握し、それに照らしてこれらの主張の正否を検討し直すことでなければならぬ。しかし、こうした学問的作業の前には多くの困難が横たわっている。まず第一に、ハンガリー経済史の多くは単なる事実の年代記にとどまるか、⁽⁴⁾さもなければ政治性ないしイデオロギー性の強い書物であって、近代的な方法にもとづく科学的分析とはいえず、同一のデータがまったく違った具合に解釈されている場合も、少なくない。それと関連して第二に、全体の経済成長にかんする総合的指数や、経済がいかに有効に作用したかを示す統計をみいだすことは、はなはだ困難である。第三に、二十世紀前半の著作のなかには、客観的な比較研究の態度がまったくみられない。

ところが最近になって、ハンガリーの中堅的な学者の間に、従来の学風をのりこえようとする新しい傾向が現われ、幾多のすぐれた研究成果を発表している。このグループに属する人々としてはハレンド Ivan Berend、ラーンキ György Ránki、ハナーク Péter Hanák、カトゥス László Katús⁽⁵⁾らあげることができる。これらの人々は、ハンガリーの経済的發展および二重帝国内のハンガリーの相対的地位について、正確な統計にもとづき、比較的な研究方法を駆使して、客観的にアプローチしようとしている点が特徴的であって、われわれもまた教えられるところが多い。本稿も、これらの学者の一連の研究を主要なよりどころにしなければならぬが、同時にまたそれらの研究にも疑念をさしはさむ余地がないわけではない。それらについては私見で補足を加えながら、以下の考察を進めてゆきたいと思う。

- (一) こうした見解はハンガリーでもみられなくてはな^らず。たゞえば、Sándor Matlekovits, Közös vámterület és gazdasági eleválás Ausztriától Budapest, 1935; S. Katona, A közös vámterület, Budapest, 1935; L. Láng, A vámpolitikai az utolsó száz évben, Budapest, 1904 などがある。しかしそれは、な^らず、このカネーヌナリ側は、支配的であ^る。Rudolf Keller, Die Industrieforderung in Ungarn, Prague, 1906; Wilhelm Offergeld, Die Grundlagen und Ursachen der industriellen Entwicklung Ungarns, Jena, 1913; Rudolf Sieglhart, Zolltrennung und Zollinheit, Wien, 1915. Hanák, p. 266.
- (二) 特^に Soma Mudrony, Iparpolitikai tanulmányok a hazai ipar emelése tárgyában, Budapest, 1877; David Pap, Magyar vámterület, Budapest, 1904; Memorandum on the Development of the Home Small and Large-Scale Industry, Budapest, 1909 を見よ。Hanák, op. cit.
- (三) Sándor, Nagyvári fejlődés; Vilmos Sándor, A tőkés gazdaság kibontakozása Magyarországon 1849—1900, Budapest, 1958; Ivan T. Berend and György Ránki, A monopolkapitalizmus kialakulása és utalma Magyarországon 1900—1944, Budapest, 1958. Hanák, p. 267 f. 参照。
- (四) Heinrich Benedikt, Die wirtschaftliche Entwicklung in der Franz-Joseph-Zeit, Wien, 1958 などの例がある。
- (五) 最近このグループの学者たちが、英語・ドイツ語・フランス語・ロシア語などで数々のすぐれた研究成果を発表していること

は、*オーストリア* 好都府である。*オーストリア* 著書としては、次のようなものがある。Studien zur Geschichte der Österreichisch-Ungarischen Monarchie, *Studia Historica Academiae Scientiarum Hungaricae* 51, Budapest, 1961; Die nationale Frage in der Österreichisch-Ungarischen Monarchie 1900—1918, Budapest, 1966; Pamlányi, E. (ed.), Social-Economic Researches of the History of East-Central Europe, *Studia Historica* 62, Budapest, 1970; Berend and Ranki, Economic Development in East-Central Europe in the 19th and 20th Centuries, New York and London, 1974. *オーストリア* は、*Hankó, Berend, Ranki* などの *Austrian History Yearbook: Die Habsburger Monarchie 1848—1918*, Bd. 1., Die wirtschaftliche Entwicklung, Wien, 1973 なども寄稿している。ハンガリー語によるものは、もちろん非常に多々。

三 帝国両半部の経済成長の比較

前章でみたように、従来ハンガリーの歴史家たちの多くは、オーストリアとの政治的なつながりがハンガリーを経済的に不利な従属的地位におき、ハンガリーの経済的成長を妨げもしくは制限する大きな原因となったこと、ハンガリー経済の農業的性格、その後進性および構造的なゆがみの主要な原因であったことを力説してきた。この見解の正否を検討するために、ここでは次の四つの視点を設定することにする。¹⁾

第一は、十九世紀中葉から第一次大戦直前に至る時期に、ハンガリーが実際にどのような経済的發展をとげたか、同時期のオーストリアの経済的發展と比較してそこにはどのような特徴がみられるかを、具体的に明らかにすることである。それによって、二重帝国内でのハンガリー経済の相対的地位はおのずからはっきり浮かびあがるであろう。

第二は、ハンガリーの農産物をより、高度に工業化されたオーストリアの商品と交換する際に、ハンガリー側にはたして欠損はなかったか、という点の検討である。

第三は、二重帝国という一大共同関税地域の存在は、ハンガリーの工業化を制限しなかったかどうか、もし制限し

たとすれば、それはいかなる形での程度まで行なわれたか、という点の考察であり、これこそ問題の核心にせまる最も重要な論点といわねばならない。

第四は、外国資本、特にオーストリアからハンガリーに流れこんだ資本の役割である。オーストリア資本の流入は、民族的独立戦争の失敗と完全な主権の欠如がもたらした結果であり、もっぱら搾取、経済的依存、従属の道具とみなされる、というハンガリー史学の在来の見解を吟味することが、そこでの中心テーマとなる。

第一の設問から出発しよう。その際ハナーク Peter Hanák は、有効かつ特徴的な一つの指数として、年間の国民所得を取りあげているが、わたしもこれを一応考察の手がかりにしようと思う。二十世紀十年代のハンガリーについては、かなり正確な国民所得の統計がフェルナー Frigyes Fellner およびヴァイツナー Ernst Wainzer の著書のうち見出され、一般に経済史家の間で利用価値のあるものと認められているが、ハナークはこの時期にかんする統計的方法をそれ以前の時期にも適用して、次のような見積りを行なっている。

表1は、一八五〇〜一九一三年間のハンガリーの純生産物を示すものであるが、この表を成長指数と関連させて読む場合には、六〇年余の期間中におこった貨幣価値の変動を考慮に入れなくてはならない。今かりに、この期間に生じた価格の上昇を補整するために約率を差引くとすれば、この時期のハンガリーの純生産物の真の

表1 1850—1913年間のハンガリーの純生産物 (単位、100万クラウン)

	農 業	パー セント	工業 および 鉱業	パー セント	商業 および 輸送	パー セント	純 生 産 物 の 総 計	(一八五〇=一〇〇) 成長 率
1850	670	80	95	12.0	55	8.0	820	100
1870	800	76	180	16.5	80	7.5	1,060	130
1900	2,209	63	860	25.3	409	11.7	3,478	424
1911—13	4,549	64	1,840	25.9	722	10.1	7,111	867

オーストリア=ハンガリー二重帝国の構造と特質 (一)

成長度は、約六倍と見積られるが、とりわけ重要なのは、工業および鉱業の生産高が十一ないし十二倍に増加し、またその百分比が、六十年間に約二倍に増えていることである。

次に表2⁽⁵⁾によって、ハンガリーにおける成長の割合をオーストリアのそれと比較してみよう。

この表は、一八五〇年から一九一〇一三年に至る間に、オーストリアとハンガリーにおける経済的發展の割合が、その差をつめたことを示している。この期間の純生産物の成長率指数は、ハンガリーでは八六七%であり、価格の上昇に適当なしんしゃくを加えるならば、約五〇〇%となるが、オーストリアでは六六四%にとどまり、価格指数を考慮に入れるならば、約四〇〇%にすぎなかった。純生産物総計のなかで農業のその占める割合は、ハンガリーでは四〇%から五二%に増加し、工・鉱業のそれは、一六%から二四%に増加している。いいかえれば、一八五〇年におけるオーストリアとハンガリーの間の工・鉱業純生産物の八四対一六という比率は、一九一三年までに七六対二四に変わり、また一八五〇年における純生産物総計の七〇対三〇という比率は、第一次大戦直前までに六三・六対三六・四に差をつけているのである。

帝国の両半部の間純生産物総計の比率にみられるこのような変化

表2 1850—1913年間のオーストリア=ハンガリーの純生産物 (単位 100万クラウン)

	オーストリア				ハンガリー				帝国全体	
	オーストリア	オーストリア	ハンガリー	ハンガリー	オーストリア	ハンガリー	オーストリア	ハンガリー	帝国全体	帝国全体
	1850				1911-1913					
農業	1,070	60	670	40	1,740	4,185	47.9	4,549	52.1	8,735
工業および鉱業	520	84	95	16	615	5,809	75.9	1,840	24.1	7,648
商業および輸送	285	83	55	17	340	2,446	77.2	722	22.8	3,169
純生産物の総計	1,875	70	820	30	2,695	12,441	63.9	7,111	36.4	19,552

は、些細なものとはいえないし、それはまた他のデータによっても裏づけられる。オーストリアとハンガリーの蒸気機関の馬力総計の比率は、一八六三年には八二対一八であったが、一九一三年には七四対二六となった。これは、約十五年間に八%だけハンガリーに有利に変化したことを意味している。⁶⁾また、工業労働者の全人口中に占める割合は、オーストリアでは一八六九年と一九一〇年の間に四・五七%増加したが、ハンガリーでは同じ時期に八・三二%増加し、約四%の差をつけている。⁷⁾

オーストリアとハンガリーの経済力にみられるこのような変化は、共同経費に対する両国の分担額の割合の変化のうちにも、あらわれている。分担額は、交渉にあたる両当事者が討論のうち相互評価を行なう結果として決定されるものであったから、両国の国民所得の割合とほぼ一致すると推定されるが、一八六七年と一九〇七年の間にハンガリーの分担額が六・四%の増加をみていることは、まさにこの時期の国民所得の割合にみられる変化と合致している。なお一人当たりの純所得をとっても、一八五〇年の時点で、オーストリアでは一〇七クラウン、ハンガリーでは六二クラウンであったが、一九一〜一三年の時期には、オーストリアでは五一七クラウン、ハンガリーでは三六〇クラウンとなり、一〇%だけハンガリーに有利に変化したことを示している。そこで、以上の諸点を一応次のようにまとめることができよう。目下考察の対象となっている時期に、ハンガリーの経済はオーストリアのそれに比して約六%ないし七%だけ進んだが、しかしオーストリアの経済もまた急速なペースで発展しつつあった。

しかし、これはどこまでも相対的な比較にとどまることを忘れてはならない。第一次大戦直前の時期においてさえ、二重帝国のオーストリア部とハンガリー部の間で経済発展の水準になおはっきりした格差があったことは、二重帝国各地の純生産物の配分状態を示す表⁸⁾から、うかがうことができる。これによれば、国民所得の百分比が全人口の百分比を上まわっているのは、現在のオーストリアおよびチェコ人の諸州だけであって、他のすべての地域では下

オーストリア=ハンガリー二重帝国の構造と特質 (一)

表3 オーストリア=ハンガリーの両国および諸州間の純生産物の配分状態
1911-1913 (百分比で示す)

	現在のオーストリア	チェコ人の諸州	ガリツィアとブコヴ	南スラヴ人とイタリ	ア人の諸州	帝国のオーストリア	
農業	9.9	22.2	10.6	5.2	47.9		
工業および鉱業	22.8	40.4	7.9	4.9	76.0		
商業および輸送	27.3	26.6	16.4	6.9	77.2		
純生産物の総計	17.7	30.0	10.5	5.4	63.6		
サーヴィス	27.1	22.8	13.0	7.2	70.1		
純国民所得	19.2	28.9	10.9	5.7	64.6		
人口の百分比	12.9	20.3	18.1	6.5	57.8		
	現在のハンガリー	ブルゲンランド	チェコスロヴァキア	ルーマニア	ユーゴスラヴィア	帝国のハンガリー部	ガリツィア=ハン
農業	20.3	1.0	8.2	11.0	11.6	52.1	100
工業および鉱業	11.6	0.3	4.2	4.7	3.2	24.0	100
商業および輸送	9.5	0.3	3.7	4.9	4.4	22.8	100
純生産物の総計	15.1	0.6	5.9	7.6	7.1	36.4	100
サーヴィス	12.8	0.3	5.7	6.0	5.1	29.9	100
純国民所得	14.8	0.6	5.8	7.3	6.8	35.4	100
人口の百分比	15.4	0.6	7.2	10.6	8.4	42.2	100

説 まわっていることが知られる。

論

なお一九一四年前には、ハンガリーの一人当たりの純所得はオーストリアのその六九%であり、一人一時間の労働量当たりの純生産物は、同じく六三%であった。⁽⁹⁾二十世紀の最初の十年間にハンガリーが実際にオーストリアよりも高い割合を占めたのは、ただ経済的効率の点だけであった。投下された資本と生産高としての国民所得を合わせたものを国民の富とみるならば、一九一〇―一三年の時期のハンガリーでは、資本と生産高の比率は四九・九一対七・二九(単位十億クラウン)すなわち六・八であり、オーストリアでは九一・六五対・一二・八一(単位十億クラウン)すなわち七・四であった。⁽¹⁰⁾このことから、世紀転換後ハンガリーで行われた大規模な投資はオーストリアでの投資に比べて生産性において幾分上まわったことをうかがうことができるが、その理由は、オーストリアでは比較的古い設備の集中度がハンガリーを下まわっていたためであると考えられる。

以上の考察によって、われわれは、ハンガリーの経済的地位の実情をかなり明瞭に知ることができた。二重帝国の時代、ハンガリーの経済的発展の水準はたしかにオーストリアのそれには及ばなかったけれども、しかしハンガリーの経済的発展が著しく遅れたものではなかったこと、その成長の速度はむしろオーストリアのそれを上まわるものであったことは、否定できない。しかし上記のデータによる考察は、なおわれわれの疑問に十分な解答を与えるものではない。そこで次に、第二の問題に目を移さなくてはならない。

(一) 以下の叙述は、とりわけ次の諸論文に負うところが多い。I. T. Berend and Gy. Ranki: *Nationaleinkommen und Kapitalakkumulation in Ungarn, 1867—1914*; L. Katus: *Economic Growth in Hungary During the Age of Dualism (1867—1913)*.
A *Quantitative Analysis (Kvantitatív Szociál-Ekonomiai Kutatások a Kelet-Közép Európa Történelmének és Gazdaságának Történelmének Szolgálatára)*: P. Hanák, "Hungary in the Austro-Hungarian Monarchy: Preponderancy or Dependency?," *Austrian History* (所収)。

- Yearbook, Vol. III, Pt. 1, 1967.
- (2) Hanák, p. 269.
- (3) Frigyes Fellner, *Ausztria és Magyarország nemzeti jóvedelme*, Budapest, 1916; Ernst Waizner, "Das Volkseinkommen Alt-Österreichs und seine Verteilung auf die Nachfolgesstaaten" *Metron. Internationale Statistische Zeitschrift*, Vol. VII, No. 4, 1928.
- (4) Hanák は利用しうる限りのデータを用い、不十分な点については若干の仮説と推定にもとづいて作業を進めているが、現在の時点ですれ以上の正確さを求めることは困難と思われる。彼はオーストリアとハンガリーを比較するにあたっては、国民所得よりも国民的純生産物の数字をもとに使用している。Katus の示す多くの詳細な統計や図表も、きわめて有益である。Hanák, p. 269 f. 参照。マジャール語の文献は直接見られなかったものが多いが以下、Hanák に従って、一応典拠を示しておく。
- (5) Hanák, p. 270.
- (6) Janos Hunfalvy, *A Magyar-Osztrák Monarchia rövid statisztikája*, Budapest, 1874, p. 124; József Sztérényi and Jenő Ladányi *A magyar ipar a világháboruban*, Budapest, 1934, pp. 36, 40-41; *Österreichisches Statistisches Handbuch*, Vol. XXXII, 1913, pp. 130 f., 132-134. Hanák, 271 f.
- (7) Hanák, p. 272.
- (8) Hanák, p. 273. 表3によつて、オーストリア部では、現在のオーストリアおよびチェコ地域の経済と南スラヴ地域・ガリツィア・ブコヴィナの経済との間に大きな差があること、またハンガリー部では、この国の西部・南部地域と東部・北部地域との間にきわめて明白な差があつたことが知られる。ハンガリー部におけるこのような差異は、のちにハンガリー内の諸民族の事情を問題にする際に、想起される必要がある。
- (9) M. A. Colin Clark. *The Conditions of Economic Progress*, 3 ed., London, 1957, pp. 99, 151.
- (10) F. Fellner, op. cit., p. 134; Fellner, *Ausztria és Magyarország nemzeti vagyona*, Budapest, 1913, p. 67. Hanák, 274.

四 共同関税地域の影響

次の課題は、ハンガリーの農産物をより、高度に工業化されたオーストリアの商品と交換する場合に、ハンガリー側

にはたして欠損はなかったであろうか、という問題の検討である。従来しばしば、ハンガリーは自国の農産物をオーストリアの工業製品と交換することによって年々数十億クラウンの損失を招いた、という議論が行なわれてきた。⁽¹⁾このような見解の提唱者は、一般に工業生産は農業生産に比してより生産的であるという主張を前提にして、これを十九世紀のオーストリアとハンガリーの関係に適用しているのである。しかしこの議論は、ある種の妥当性をもつにしても、外国貿易における利益の量を確定する際の決定的な論拠とはなりえない。二国間の貿易を問題にする際には、生産に影響を与える種々の特殊な条件と並んで、とりわけ、両地域の天然資源や経済的資産の差異を考慮にいれなくてはならない。外国貿易は、両当事国の一方が比較生産費にかんして最大の利益をうけ、他方のこうむる不利益が最小限にとどまる場合に、双方に有利であるといえることができる。いいかえれば、当事者のおのおのが特に有利な生産部門を發展させ、その部門の生産物を相互に交換する場合、双方ともに利益をうけることができるのである。そして、われわれの利用しうる広範なデータはすべて、オーストリアとハンガリーがともに、商品の交換にあたって比較生産費のうえで大きな利益を確保していたことを示している。ハンガリーがオーストリアと最も有利に売買できた商品は農産物であり、鉱山および広範な食品加工業の産物であったが、他方オーストリアにとってハンガリーと交換するのに最も有利な商品は、技術工業および軽工業の産物、特に織物であった。両者が経済的必

表4

ハンガリーのオーストリアからの輸入	
1909.....	72.47%
1910.....	75.81%
1911.....	73.41%
ハンガリーのオーストリアへの輸出	
1909.....	75.79%
1910.....	74.56%
1911.....	76.07%

要物を相互に補いあつたことは、表4の数字からうかがうことができる。⁽²⁾

すなわち、一九〇九—一九一一年の間に、ハンガリーのオーストリアからの輸入はハンガリーの輸入全体のほぼ $\frac{3}{4}$ に達し、ハンガリーのオーストリアに対する輸出もだいたいこれに匹敵する割合をなしていた。同じ時期にハンガリーとの貿易関係において第二位をしめたドイツからの輸入は、輸入全体の九%をわずかに越える程度であり、ドイツへの輸出は七%をいくらか上まわる程度であつた。第三位のルーマニアからの輸入は、平均二・五%を下まわつたし、ルーマニアへの輸出は、一・三%であつた。そして、ハンガリーのオーストリア向け輸出の大部分が農産物であり、輸入の大部分が工業製品であつたことは、表5の示すとおりである。カンのいうように、⁽⁴⁾「関税同盟によって便宜を与えられた経済地理の条件が、彼らを自然の貿易パートナーにしたことは疑いない」し、⁽³⁾「貿易関係がオーストリアとハンガリーの相互関係における強力な統合

表5

1908年におけるハンガリーのオーストリアへ輸出 (単位 100万クラウン)	
農業・林業・漁業に属する商品	680.3
鉱業・鑄造業の産物	22.1
工業	464.0
1908年におけるオーストリアからの輸入	
農業・林業・漁業	91.0
鉱業・鑄造業の産物	63.0
工業	1,078.0
1909年におけるハンガリーのオーストリアへの輸出	
農業・林業・漁業	728.0
鉱業・鑄造業の産物	21.0
工業	523.0
1909年におけるオーストリアからの輸入	
農業・林業・漁業	88.0
鉱業・鑄造業の産物	63.0
工業	1,156.0

表 6

1867年から1913年にいたる時期の農業および工業上の物価の傾向						
	農 産 物			農 業 用 燃 料	工 業 製 品	工 業 上 の 物 価 の 不 足
	植 物	動 物	総 計			
1867—1871	100	100	100	100	100	—
1872—1876	112.5	100.5	108.8	94	85	28.2
1877—1881	104.1	93.4	98.8	83.3	79	24.9
1882—1886	94.3	97.3	95.8	76	72.2	32.7
1887—1891	84.9	92.7	88.8	72.2	66.3	33.9
1892—1896	75.8	98.5	87.2	68.4	62	40.6
1897—1901	83.6	103.6	93.6	73	61.2	52.9
1902—1906	90.6	116.1	103.6	73	71.5	44.9
1907—1910	110.3	131	120.7	87	79.7	51.4
1913	112.5	157	134.7	89	93.4	44.3

的要素であった」ことは、たしかである。

対外貿易の利益は、物価の動向からも大きな影響をうけることがあり、二重帝国内の両部の貿易についても、この面を見のがすことはできない、表 6⁽⁶⁾は、一八六七〇七一年から一九一三年にいたる時期の物価の傾向を示したもので、農産物、農業用燃料、工業製品にみられる価格の変化を取扱っており、一八六七〇七一年の指数を一〇〇としてゐる。

この表からわれわれは、二重帝国の期間を通じて——十九世紀末の農業危機の間にさえも——物価の傾向が農業に好都合であったことを、知ることができる。二重帝国時代の末期まで、価格の不足は工業部門に存したのであって、第一次大戦に先立つ十年間には、それは四〇%ないし五〇%に達している。こうしたギャップの結果、戦争直前の時期には、一八六七年に比べて約三〇%ないし三五%少ない農産物が工業製品と交換されることになった⁽⁶⁾。価格構成が農業に有利であったために、オーストリアとハンガリーの間の商品交換はハンガリーの資本蓄

積のうえに決定的な効果を及ぼしたのである。

しかし、オーストリアとの通商によって得られた資金がハンガリー経済にもたらした利益は、ハンガリーの社会経済機構にはかえって不幸な影響を与えた。資本が国民経済のすでに確立された部門にはげしく流れこんだために、他の重要な経済部門の発展が妨げられたからである。すなわち、有利な販売の可能性と好都合な価格関係は、農業のために高い地代と利益を保証し、大土地所有者の力を強め、いわゆる「プロイセン型」農業の発展を促進した。このような保守的地主階級の優勢は、社会構成内部の変化を妨げ、都市化された社会層の形成をおくらせたのである。

次に第三の問題の検討に移ろう。二重帝国の共同関税地域はハンガリーの工業発展にどのような影響を及ぼしたであろうか。この問題ははじめから第二の問題と深い関係をもっているが、もし共同関税地域が存在しなかったらハンガリーにどのような工業発展の可能性があったかを証明する方法がないだけに、はなはだ厄介である。幾多の国で保護関税が工業の発展を促進したことは、よく知られているが、歴史家は、一般的法則やアナロジーにもとづいて立論する場合には、十分慎重でなければならぬし、とりわけ二重帝国の共同関税地域がハンガリーの工業発展に及ぼした影響については、議論が多だけに、いっそう注意深い配慮が必要である。

この問題の考察にあたっては、ハンガリーの工業発展の速度と傾向、工業構造にみられる変化、工業化の過程を促進しもしくは妨げた諸要因などに目を向けなければならない。まず工業発展の速度をみれば、価格の上昇に適当なしんしゃくを加えたいうえでも、一八五〇年と一九一三年の間におお一〇〇〇ないし一一〇〇〇%の増加が認められる。正確なデータのある二つの年一八九八年と一九一三年の間に、工業施設(工場)の数は八四%増加し、労働者の数は七六%、機械の馬力の出力は一八八%、生産された商品の価値は一二六%増加している。¹⁾ ハナークは、ハンガリー工業の発展を年平均五・四%の増加とみて、西欧諸国の四・六%という数字を凌駕している点に注目している。もちろん

われわれは、経済発展の劣っている国の成長率は高度に発達した国の成長率よりも大きいことを考慮に入れる必要があるが、それにしてもこの時期のハンガリーの経済成長が相当なものであったことは、否定できない。

次に、ハンガリーにおける工業発展の傾向および工業構造に目を向けよう。そこには、西ヨーロッパ諸国のそれとはちがった固有の特徴がいくつか認められるが、それらは、共同関税地域の影響を反映すると同時に、ハプスブルク帝国内で歴史的に発達してきた東西地域の分業関係を反映しているように思われる。⁽⁸⁾ 特殊な天然資源および発展の特殊な諸条件（先進工業諸国の要求など）の結果として、ハンガリーの工業はまず食品工業、木材工業、鉱業、第一次金属生産という形をとったが、たいていの農業地域においてそうであるように、ハンガリーの工業化のうえで特に重要な役割を演じたのは、小麦の製粉、砂糖、ビール、アルコール、タバコその他の食品工業であった。二重帝国内に存在した農産物のための広範な市場が、とりわけハンガリーにおける農産物の栽培と加工を刺激したのであって、蒸気製粉所は一八三〇〜四〇年代以降、農産物商人から成長した土着工業ブルジョアジーによって次々と創設され、砂糖工業は一八五〇年以後、オーストリアの投資によって発展した。⁽⁹⁾ 一八六七年には、この国の工業部門における所得の半ば以上は、食品工業によるものであり、それは一八九八年にもなお四四%をしめ、一九一三年にも三九%のほ⁽¹⁰⁾っている。ハンガリーでは、重工業部門もかなりの重要性をもち、その占める比率はオーストリアの場合とほぼ同じであったが、発展の程度はオーストリアよりも低く、原則として銑鉄その他若干の未加工製品を生産した（Ⅱ第一次金属生産）にとどまり、機械工業のいくつかの部門はまったく欠けているか、発達がおくれていた。オーストリアでは機械工業と鉄および金属工業との比率は四六対五四であったが、ハンガリーでは三七対六三にとどまっていた。⁽¹¹⁾

共同関税地域の影響はまた、軽工業の不利な発展のうちに看取される。軽工業部門のなかで比較的重要な役割を演じたのは製材業で、ハンガリー北部と東部の森林地方およびクロアチアでは、木材工業が近代的な工業化の指導部

門となつたのである。それと対比的に、他の諸国の工業化において指導的役割を演じた軽工業部門すなわち織物工業や被服工業の占める割合は、著しく小さかった。一八四八年以前に、ハンガリーには織物工業の萌芽的形態が存在したが、それは、五〇年以後の共同関税地域内で、オーストリアとチェコの進んだ織物工業との間に行なわれた競争の結果、しぼんでしまった。こうして、一八六七年のアウスグライヒの時点では、大規模な織物工業はほとんど存在せず、一八九八年にも、織物業の生産は工業部門の所得の三・六%をもたらしたにすぎず、一九一三年にも、ようやく六・三%に達した程度であつた。

ただ二〇世紀のはじめになつて、ハンガリーの工業構造のうちにある種の変化がおこつたことは、無視できないが、それについては次章で考察することにする。ここでは、一九一三年にもなお、軽工業からの所得は全工業部門中のわずか二〇%にすぎず、それに比して重工業の所得は四一%、食品工業の所得は三九%に達していたことを、指摘するにとどめよう。¹²⁾

以上の諸点からわれわれは、オーストリアの工業がハンガリー工業を妨げる役割をはたしたことを、見のがすわけにはゆかない。共同関税地域は、ハンガリー農業の急速な発達の根本的な刺激の一つではあつたが、そのかわりにハンガリーは、織物工業の異常なおくれという代価を支払わねばならなかつたのである。しかも、ようやく台頭した織物業その他軽工業の多くは、また機械や鉄を生産する企業も多くも、共同市場でのオーストリア製品との競争にかなりの程度苦しまねばならなかつた。ハンガリーの工業界は数十年間、オーストリア工業との太刀打できない競争について、のちにはオートリア=カルテルの競争的性格について、たえず不平を並べたが、それは十分理由のあることであつた。ハンガリーの工業家が有利な地位を得るための唯一の方法は、オーストリアの企業とともにカルテルをつくることであるという指摘が、同時代の評論家たちによってしばしば行なわれている。¹³⁾ 二重帝国の関税政策が高度

に発達したオーストリア工業に好都合であったことも、ハンガリーの製造工業にとつては不利な材料であった。外国の工業製品に対する高い——しかもますます高くなってゆく——関税障壁によつて保護された広い市場がハンガリー内に存在したことは、たしかに、オーストリアにおける大規模工業の強化と資本蓄積の増大に著しく貢献した。また、オーストリアのブルジョアジーが、ハンガリー企業との競争力の成長を抑えるために、時に政治的圧力を加えようとしたことも事実である。¹⁴⁾

しかしながら、二重帝国時代にハンガリー工業のさまざまな部門の発展がおくれた事実を、オーストリア政府なしオーストリアブルジョアジーの側の自覚的なあるいは故意に抑圧的な経済政策に帰することは、正当ではないであらう。彼らがそうした政策をとつた場合にも、その努力はわずかな成功しか収めえず、それもほんの一次的なものにすぎなかったといわれている。ハンガリー工業の立ちおくれを説明するためには、むしろ「利潤」と「収益性」を重視する資本主義の法則を引合いに出さなくてはならない。ハンガリーの企業家や外国の資本家たちは、何よりもまず、最も急速に収益をあげ、かつ最大の利潤をあげることができるような有利な諸企業に、自己の資本を投入した。最初彼らの投資は、主として鉄道建設、銀行、国家への貸付け、抵当権、鉱山業および食品工業に向けられたが、ハンガリーの事業に投資した人々は、競争を最小限に抑えるために、オーストリアですでに確立されている企業と同種のものに資本を注入しないように、特別の注意を払っていた。これが、ハンガリー工業の成長を阻んだ主要な原因だったのである。とすれば、オーストリア工業とハンガリー工業との関係は単一の経済共同体内の高度に発展した国と発展のおくれた国とが相互に及ぼしあう影響を不可避に反映したもので、といわなくてはならない。そこで残された問題は、この共同体がどの程度まで、ハンガリーの工業化に有利であったかを確かめることである。いっそう明確にいえば、世界的規模で発展した食品工業をもつことの利益は、東欧的見地からみてさえ遅れている織物工業の不利益より

も大きかったのであろうか。この問いに対しては、次のように答えることができよう。収益性と資本蓄積の観点からすれば、前者の利益の方が大きいことは疑いをいれない。なぜなら、食品工業は、生産費が比較的小さいために急速な資本蓄積を可能にし、さらに農業生産をも促進したからである。しかしながら、もし工業化の連鎖反応的な効果を考慮に入れるならば、食品工業をもつことの利益は、織物工業をもつことの利益よりも小さかったといわなくてはならない。なぜなら、後者は、他のもろもろの工業部門とはるかに緊密な関係をもつものだからである。さらに社会的な見地に立てば、食品工業は少数の労働者——しかも主として季節的な日雇い労働者——を雇用するにとどまったから、ハンガリーの社会構成を根本的に変化させる可能性は、食品工業の優越によってはるかに強く制限されたのである。

以上の考察をふまえて、ハンガリーの経済的発展に対する共通関税地域の影響という当面の問題についての解答を、一応次のようにまとめることができよう。共同関税地域の主要な利点としては、四〇〇〇万ないし五〇〇〇万の人口をもつかなり大きな統合的市場をつくり出し、投資のためにまた急速な資本蓄積のために大きな魅力を提供し、実際に高度の収益を可能にしたこと、などがあげられる。一九一三年に、有限責任工業会社の資本の産出比率は四であったが、これは、投下された資本が四年後には投資家に還元されたことを意味し、利潤率の異常な高さを思わせる⁽¹⁷⁾。しかしその反面、食品工業が支配的役割を演じたという事実は、ハンガリーの工業構造にとって、さらにこの国のいっそう有機的かつ効果的な工業化のために、また国内市場の拡大のためにも、不利益をもたらした。ハンガリーの食料製品のための市場は、大部分現在のハンガリー領外にあったのである。最後に、二重帝国内の分業の条件に適應したハンガリーの工業構造は、近代的な階層形成を決定的におくらせた。要するにハンガリーは、オーストリアと組んでいたために、食品工業は育成されるが軽工業とりわけ織物製造業の発展は妨げられるという特殊な工業発展の形態を

とることになり、これは、経済的見地からは完全に筋の通ったことであつたが、他方熟練労働者階級の成長を妨げ、社会的発展を遅延させる結果になつたのである。

- (1) Matlekovits, Közös vámterület, p. 69. Hanák, p. 274.
- (2) Robert A. Kann, The Habsburg Empire : A Study in Integration and Disintegration, London, 1957, p. 95.
- (3) Ibid.
- (4) Kann, op' cit., p. 96.
- (5) "A magyar mezőgazdaság árhelyzete az utolsó évszázadban (1867—1963)" in Statisztikai Időszaki Közlemények, 1965—66 p. 31 f. Hanák, p. 275.
- (6) "A magyar mezőgazdaság (1867—1963), p. 41. Hanák, p. 276.
- (7) Berend and Ránki, Magyarország gyáripára az imperializmus első világháború előtti időszakában 1900—1914, Budapest, 1955, p. 296 f. Hanák, p. 277.
- (8) この点については、後章で立入って考察する予定である。
- (9) Katus, Economic Growth in Hungary : During the Age of Dualismus (1867—1913), p. 76 f.
- (10) Berend and Ránki, op. cit., p. 296 f. ; Vilmos Sándor, "A budapesti nagymalomipar kialakulása 1839—1880" in Tanulmányok Budapest Multjából, Vol. XIII, Budapest, 1959, pp. 315—422. Hanák, p. 277.
- (11) Berend and Ránki, "Das Nibeau der Industrie Ungarns", p. 282.
- (12) Berend and Ránki, Magyarország gyáripára 1900—1914, p. 295. Hanák, p. 278.
- (13) Pap, Magyar vámterület, p. 304. Hanák, p. 278.
- (14) Hanák, p. 279. Hanák によれば、Pap は op. cit., pp. 263—275, 285—304 において、個体なくハガリー工業と競争する際にオーストリア人が使用したあらゆる方法について、詳しく説明してしまふ。
- (15) Emma Léederer, Az ipari kapitalizmus kezdetei Magyarországon, Budapest, 1952, pp. 75—119 ; Sándor, Nagyipari fejlődés Magyarországon, pp. 19—30 ; Berend and Ránki. Az ipari forradalom kérdéséhez Ketet-Európában. Hanák, p. 279.

- (9) Sándor, op. cit., p. 77 f. Hanák, p. 280.
- (17) Hanák 著 Magyar Statisztikai Évkönyv, Vol. XXI, 1913 年 4-6 頁 Magyar Statisztikai Szemle, Vol. I, No. 7 - 8, 1923 年のなかのゾータに於いては主としてその数字に注意せよ。Hanák, p. 280.